

# 多彩な人材被災地へ

## 子どもに「未来」託す

### これから

—大震災を生きる

宮城県女川町で東京のNPO法人が運営する無料の学習塾「女川向学館」には、さまざまな思いが集う。

同町出身で、首都圏の大手時計メーカーに勤務する東海菜さん(29)。昨年10月から半年間休職し、ボランティアで中学生の個別指導に当たる。

記憶にあった古里の風景は、震災で見る影もない。町内の実家は全壊し、父春男さん(当時60)は勤め先の石巻市内で津波にのまれた。

「生徒たちの心は揺れ動いている。出来事をまだ整理できていないのかもしれない」。東海さんは父を亡くした思いを重ね合わせ、一人一人に優しく寄り添う。

「傷付いた心をたくさん目で見守る『ゾーンディフェンス』を続けていきたい」。向学館を運営する「カタリバ」代表理事の今村久美さん(32)は言う。

慶大在学中の2001年に友人とカタリバを設立し、首都圏で高校生のキャリア教育に取り組んできた今村さん。大学に入ってから活動の原点だ。「どんなときも目標を見失わないで」。子どもたちにメッセージを送り続ける。

「被災したものは大きい。それでも、震災を経験しなければ得られなかったものがある。そう信じる向学館のスタッフには、ある詩を胸に刻む。『女川は流されたのではない。新しい女川に生まれ変わるんだ。人々は負けず待ち続ける。新しい女川に住む喜びを感じるために』」

### 上司が応援

悔しかった。遠くにいる何もできなかった自分に、むなしさを感じた。

そんなとき、向学館がボランティア講師を募集しているを知った。「先輩たちの力になりたい」。

職場の上司に相談すると「仕事のこととは心配するな」と背中を押された。

全国のボランティア仲間7、8人と借家で共同生活を送りながら、向学館に通う日々。学習指導の傍ら、子どもたちの声

に耳を傾ける。学習の遅れに強い不安を抱く生徒がいる。家族を失った悲惨な体験を、あつげらんと話す生徒もいる。「生徒たちの心は揺れ動いている。出来事をまだ整理できていないのかもしれない」。東海さんを見失わないで。子どもたちにメッセージを送り続ける。

### 2校目開設

向学館開校から5カ月後の昨年12月中旬、カタリバは被害が甚大だった岩手県大槌町に、2校目の無料学習塾「大槌臨学舎」を開いた。学校や公民館を間借りした教室で、中学生85人が地元塾講師

やボランティアに学ぶ。熱い思いは、大人たちにも広がった。塾を畳もうと考えていた65歳男性、屋間は災害FMのパナーナリティーをしている29歳女性…。多彩な顔触れが、子どもたちと共に歩む。

被災した小学6年生が作ったという詩で、復興を目指す象徴的な一文として知られる。町の主要産業だった漁業は壊滅的な被害に遭った。地元経済に恩恵をもたらしてきた東北電力女川原発は運転停止が続き、安全対策を懸念する声もくすぶる。「震災を乗り越える」ということは、震災前に戻すことではないと思う。町の新しい未来を築く可能性と力を子どもたちに託したいんです。今村さんは被災地の「希望」を思い描く。



大槌臨学舎の開校式で講師陣やスタッフを紹介する今村さん(右手前)  
—2011年12月15日、岩手県大槌町の上町ふれあいセンター



盛岡市  
大槌町  
岩手県  
宮城県  
仙台市  
女川町